
不良野良犬パイイチ

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良野良犬パイイチ

【Nコード】

N4457R

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

2000字前後と設定して書きました。うまくまとまっていなかったら、ごめん。

「カネ出せこら」

「な、ないですよ」

「うそこけ。じゃあ、ジャンプしてみろ」

学生は仕方なく、ぴよんぴよん跳ぶ。

すると、ちゃりんちゃりと音がする。

「小銭持つてるじゃねえか。全部出せ」

「ふえええん」

パイイチは学生から奪ったカネでスーパーに行く。

ドッグフードコーナーに回り、物色。

「骨つこいいなあ。このササミ巻きてのもいいなあ」

自然によだれが垂れてしまう。尻尾をふりふり。

結局、パイイチは一番安い犬缶を買う。

パイイチは寝ぐら、すなわち橋の下に戻った。

段ボールでこしらえた家に入る。

「ワインなかったかな。確か幻さんにもらったやつがあつた筈だが」
幻さんてのは、近所のフランス料理店のシェフだ。

パイイチは、その夜、ワインと犬缶で晩飯を済ませ、川で身体を洗ったあと、寝た。

パイイチの彼女を華子という。華子は雌犬ではない。れっきとした人間の娘だ。

なぜ華子とパイイチがつき合っているのか。実はパイイチは以前に華子の家で飼われていた。華子とパイイチは恋に陥った。人間と犬。禁断の恋だ。

ある日、パイイチは、華子の父親に娘さんをくださいと頼んだ。すると父親が犬の分際で生意気なと怒ってパイイチを追いつ出したってわけだ。

以後、パイイチと華子は、華子の親には内緒でこっそりと会って

いる。

パイイチは、朝、目が覚めると、外に出て、ドッグ体操をする。それから朝ごはんにする。今朝は、骨つこと、幻さんにもらったワインだ。

酔っぱらいながら、パイイチは、みかん箱の上に原稿用紙をひろげ、小説を書き始める。

「ううん。なかなか進まないなあ」

パイイチは、野良犬ではあるが、早くアパートに住みたいので、プロ作家を目指している。

書いては丸め、書いては丸めの繰り返し。

気分転換にギターをぼろりと弾く。

パイイチは駅前で演奏しようと思い、ギターをひもでくりつけ背中に背負い、外に出た。

土手をのぼり、道を歩く。家々が連なる。

パイイチは、華子に会いたいなあと思うが、華子は仕事 중이다。

唐突に、チャールズ・ブラウスキーのことを思い出す。ブラウスキーはアメリカの作家であり、パイイチのお気に入りだ。

「ブラウスキーみたいな、やんちゃな作品書きたいなあ」

パイイチは歩きながら考える。

駅前広場に着き、パイイチはギターを抱え熱唱。通行人が立ち止まり聴き入る。パイイチはなかなかうまくない。

お金を投げてくれる人もいる。今日の稼ぎは、512円であった。パイイチは、これで、ササミ巻きガムを買おうと思う。

パイイチは、ギターを背負い、おもしろ市場へ向かった。

おもしろ市場は、海の近くの広場にある。ごみを敷いているんな人が、いろんな、おもしろい物を売っている。平日だというのに、けっこう賑わっている。

「兄ちゃん。これどうよ。サングラス」

あから顔の太った親父がサングラスを見せる。

「何もおもしろくないやん。ここがおもしろ市場だっちゅうことを

忘れちゃダメだぜ」

「まあかけてみなよ」

パイイチは言われるままに、サングラスをかけてみた。

「み、見えん。全く見えん！」

「うはははは。おもしろいだろう」

全然面白くない。

パイイチは親父の頭を叩いて、サングラスを返した。

「痛いなあもう。暴力反対」

「ちゃんとした、おもしろい物だぜ」

「ちゃんとしたって厄介な要求だなあ。ふざけてるからおもしろいんじゃないか。あ。そうだ」

親父は店の奥から大きな箱を持ってきた。

「何だよこれ」

「まあ開けてみな」

パイイチが箱を開けると、ピカツと光った。

そして、誰もいなくなった。

「原爆オチにすんなー————」

読者、作者に回し蹴り。

再び、おもしろ市場。すでにパイイチの姿はない。飽きて、どこかへ行ってしまったようだ。どこに行ったのか。

パイイチは、ジャスコ内にある楽器店で、ギターを背負ったまま、ピアノを弾いていた。

「ああ。気持ちいいなあ。これほしいなあ。おお。最高」

学校をさぼった女子高校生が、聴き入っている。

「あんた、犬のくせに上手いねえ」

「犬のくせには余分だい」

店員は、パイイチが一時間も弾いていたので、さすがに追い出し

た。

「へえ。あなた、パイイチっていうの。変な名前」

「ロリ華だって十分変な名前だい」

女子高校生と、ジャスコ店内にある喫茶店に入ろうとした。

すると、犬は入っちゃだめという。

「仕方ないねえ」

「差別だワン」

「犬語出てるよ」

仕方ないので、ジャスコの近くにある図書館に行った。

中庭の芝生の上に座り、ジャスコで買ってきた弁当を二人して食べる。ギターを、スズメが弾こうとしてるが大きすぎて持てない。

あたたかな日差し、気持ちがいい。

「そう。あなた、小説家目指してるの」

「ロリ華ちゃんこそ、何で学校さぼってんの」

「かつたるくてさあ。つまんなのよ学校」

「小説書かないか」

「それって面白いの」

二人が楽しく会話してたら、クレイジーキャットのやつらがやって来た。

「探したぞ。パイイチ」

「かわいい子といちゃいちゃしてやがって。このくそ犬め」

「てめえら」

クレイジーキャットは、パイイチが所属するヤンキー野良犬集団「マッドドッグ」が敵対するヤンキー野良猫集団だ。全員、尻尾が立ってる。

「パイちゃん。怖い」

「ロリ華ちゃん、心配しないで」

かーーーーん。

わああああああああああああ。

「え。え。何この観客。ここ図書館のはずなのに」

いつの間にか、周りに大観客。

「いつも戦うときは、こんな感じさ。来い、にゃん五郎」

「生意気な。パイイチ」

「コロセー」

「やっちまえー」

「冬でも冷やし中華食わせろ」

戦いは始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4457r/>

不良野良犬パイイチ

2011年3月7日20時25分発行